

地方に伝播する医学情報：屋形諸道（1746～1826） の医学修行

ミヒエル, ヴォルフガング
九州大学名誉教授

<https://hdl.handle.net/2324/2800502>

出版情報：史料と人物. 7, pp.47-75, 2020-03-31. Board of Education, City of Nakatsu
バージョン：
権利関係：

史料と人物

中津市歴史博物館分館

医家史料館叢書Ⅻ



VII



左右前後而互
馬以備它日之考
永庚子秋七月上
中津府
貞來元龍子登督序

明治
三
澤
正
年

ミヒエル・ヴォルラガング、吉田洋一、大島明秀 共編

中津市教育委員会、令和二年三月

宗
子
子
子

中津市歴史博物館分館 医家史料館叢書Ⅻ

史料と人物

VII

ミヒエル・ヴォルフガング、吉田洋一、大島明秀 共編

中津市教育委員会、令和二年三月

地方に伝播する医学情報 ― 屋形諸道（一七四六―一八二六）の医学修行 ―

ヴォルフガング・ミヒエル

キーワード

屋形諸道以文、屋形養民、下毛郡、在村蘭学、長崎遊学、倉成龍渚、吉雄耕牛、Carl Peter Thunberg、Karl Gabriel Springer

はじめに

平成一六年に中津市に寄贈された「屋形家資料」の中に、本耶馬溪地域で初代村医として活動していた屋形諸道（一七四六―一八二六）による一連の写本がある。本稿では医学情報の地方への伝播の事例として、諸道が書き記したものをもとに、明和四（一七六七）年から約九年間続いた諸道の医学修行を検証する¹⁾。

一、医家の誕生へ

近世ヨーロッパには、いわゆる「小外科学」を修得した（床屋）外科医を養成するギルドと、内科を中心に高度な知識を持つ医師・医学者を養成する大学という二種類の公的な医療従事者養成機関があったが、臨床現場ではこのような「専門家」のほかに「葉草婆」、「軟膏男」、テリアク商、奇術師、祈祷師、藪医（quack）など専門的な職業訓練を受けたこと

のない者も病人の治療に当たっていた。医療市場は自治権を持つ都市では法令によって規制されていたが、地方の町や農村では野放しの状態だった²⁾。日本はかつて国を挙げて中国の医学を導入し、典藥寮や足利学校のような医療従事者の養成や医療の管理を行う機関も設立されたが、江戸時代の幕藩体制下では医療の統治権は各藩にあった。各藩における統制の状況や程度は様々であったが、一般的には藩主の侍医や城下町の町医師になるには一定の専門教育とそれを証明する免許状が求められ、ときには地元医師による吟味が行われることもあった。とはいえ長崎の名医・向井元升（一六〇九―一六七七）のように儒学を起点に医学を独学で修得して優秀な医者になった例もある³⁾。産科医・賀川玄悦（一七〇〇―一七七七）もそのような例の一つである⁴⁾。

政治的・社会的流動性が高い一七世紀に藩領内で本格的な開業を目指す場合には、できるだけ幅広い修行が必要だった。その土地で医師がすぐに必要かどうかや人脈の有無も重要だったが、大抵は師匠の名声や何らかの特技をアピールし、定住と開業の許可を得るのが一般的で、これは豊前中津においても同じだった。村上家、辛島家、大江家、根来家の例を見ていくことにする。

村上医家の初代・村上宗伯（？～一六七〇）は、村上蓮休の三男として行橋の浄喜寺に生まれ、医界の主流だった曲直瀬道三流医学を受け継いだ大坂の儒医古林見宜（一五七九～一六五七）に師事した。宗伯は寛永一七（一六四〇）年七月に免許皆伝を受けたが、彼の免許状は江戸中・後期のものと比べるとごく短い簡単なものであった。その後、宗伯は中津諸町で開業し、小笠原家初代藩主・小笠原長次の御典医を務めた⁶。

辛島家の初代・辛島正庵玄快（一六七八～一七六九）は「辛島家系図」によると延宝六（一六七八）年に宇佐郡辛島村で生まれ、元禄一二（一六九九）年から第五代藩主・小笠原長邕^{ながさと}の御典医平田道巴に医学を学んだ。その二年後京都に遊学し、さらに長崎で研鑽を積み、元文四（一七三九）年に六一歳で侍医となった。平田道巴が正庵に授けた免許状には出島商館医ライエン（Cornelis de Layen）とデルクス（Arnout Dircksz）による蘭文があるが、これは道巴が父・平田長太夫の修業証書（一六六六年）から写したものである。一六五〇年代に芽生えた紅毛流外科術がすでに小笠原時代の中津藩にも根を降ろしていたことがうかがえる事例である⁷。

鷹匠町と京町の二つの大江家の血縁関係を裏付けるのは、中津藩の「文化三年改」に集録された大江玄仙および大江雄山（博行）の系図である⁸。大江五郎衛門の長男として生まれた両医家の祖・玄仙（一七一〇～一七九二）は、長崎で鳥飼道節から嶋田道碩^{とうせき}に伝わった南蛮・紅毛折衷の外科術を学

び、宝暦四（一七五四）年に免許皆伝を受けた。当時は約一〇〇年前から続いていたこの栗崎流外科術がまだ高く評価されており、玄仙は宝暦八（一七五八）年に中津藩に召し抱えられ、隠居するまで二三年間御典医を務めた¹⁰。

遠方からも医師が招聘されるなど、中津の「知的インフラ」整備はさらに進められた。明和二（一七六五）年に奥平家第三代藩主・奥平昌鹿から本道御医師に召し出された根来東麟（東林、行直。一七三一～一七八七）は「人身連骨真形図」で画期的な功績を残した眼科医・根来東叔（一六九八～一七五五）の長男として山城で生まれ京都で育った。中津近郊の天仲寺山にある墓碑は、朱子学、本草学、中医学の古典に精通した東麟の知識の幅広さや「西学」に対する考え、古方を基礎とする姿勢のほか、東麟の知的基盤を育んだ父・東叔の医学についても詳細に伝えている。医学のほかにも多様な学問に通じた鬼才三浦梅園が東麟の家で見た漢籍には、明や清朝で活動していたイエズス会士「羅雅谷」(Giacomo Rho)、「南懷仁」(Ferdinand Verbiest)、「湯若望」(Adam Schall von Bell) によるものもあり、東麟の広い視野と厚い人脈がうかがえる¹⁰。

城下町とは異なり、近世前期の村には医師はほとんどいなかった。中津藩も例外ではない。城下町から離れた山間の農村では収入が少ないため、農民は祈祷、呪い^{まじな}、地元の間薬などに頼らざるを得なかった¹²。医師が急増した一八世紀においても村医が医療活動のみで生計を立てるのは困難だった。

信濃国を中心に在村蘭学を研究している青木歳幸は、医師は村における有数の知識人であり、寺子屋の師匠を兼ねる場合も多かったと指摘している¹³。そもそも年貢納入の義務を負う農民が医業を志す場合は藩の許可を申請しなければならず、また帰郷後の開業にも当局の同意が不可欠だった。

二、江戸中・後期の遊学

故郷を離れ、他の土地や国で勉強することを意味する「遊学」(遊学)という語は、中国の『韓非子』や『史記』に見られ、『続日本紀』の時代から日本でも用いられるようになった¹⁴。江戸時代の修行過程において、一定期間にわたる遊学は医師として独り立ちするのに欠かせないものだった。

医家の跡継ぎと見なされる男子は幼い頃から医療活動を間近に見ながら一定の知識を身につけることができたが、いずれは故郷を離れ、本格的な専門教育を受けることになる。緊密な師弟関係の下で行われる医学教育にはヨーロッパの外科組合における見習い制度との共通点があるが、専門知識の扱いは大きく異なっていた。修行終了時に行われていたヨーロッパの検定試験は、同業者組合の規定に基づき、地元の大学教授などによって監督される公共性の高いものだった¹⁵。試験に合格した若き外科医は、その後必ず修行の旅に出て視野を広げ、技を磨いた。それに対して江戸期の日本では修業期間には規定がなく、師が門弟に伝える知識は秘伝とされることが多かった。免許皆伝は修行が無事に終了したことを証

明するとともに、その内容を第三者に漏らさないという神文で締めくくられた。近世に形成されたこの伝習形式は知の普及を遅らせ、既存の流派の枠を超える新しい制度の成立を妨げる要因となった。

医業を志す若き藩士の中には医学だけにとどまらずより広い博学的な知識の獲得を目指す者もいた。中津藩医・村上玄水(一七八一〜一八四三)は藩校の進脩館に入り、約二年間儒学者倉成龍渚及び野本雪巖の指導を受けたのちに久留米藩の儒官・梯隆恭(かげはしかみやす)に入門し、特に兵法・軍学を三年間学んだ。また、玄水の息子春海は、家督となった文政七(一八二四)年に豊後国日出藩の儒学者・帆足万里(一七七八〜一八五二)の塾に入った¹⁶。いわゆる「豊後学」を提唱する帆足万里は、四〇歳頃から蘭学者・藤林普山(ふざん)の蘭和辞典『訳鍵』(文化七(一八一〇)年刊)を入手してオランダ語を学び、ヨーロッパの天文学、物理学、博物学にも目を向けるようになった。春海が帆足万里の下で学んだのは、医学を含めた和蘭折衷的な自然科学だった¹⁷。

一八世紀後半以降は中津藩の蔵屋敷があった大坂も中津藩士の遊学先に加わった。特に人気が高かったのは、先駆的な人材を多数輩出した緒方洪庵の適塾や、華岡青洲の弟良平(あきしやう)鹿城(かじやう)、一七七九〜一八二七)が任された春林軒の大坂分塾「合水堂」(がっすいどう)だった。安政五(一八五八)年に神尾格、前野良伯、藤野貞司が、万延二(一八六一)年に松口錠七郎、和田克太郎、田代一徳、その翌年には征矢野元雄が適塾に入門した。蔵屋

敷で生まれた福澤諭吉も大坂在住の兄の紹介で洪庵に師事した¹⁸。

中津鷹匠町の大江医家の五代家督大江雲澤は天保一二（一八四一）年に合水堂に入門し、華岡流の麻酔術と外科術を学んだ。巨匠・青洲の漢詩入り肖像画や、青洲の娘婿・華岡準平とその息子良平（積軒）から雲澤に宛てた書簡が華岡家と大江家との交流を裏付けている¹⁹。「合水堂」の門人録には中津出身の大江春亭、大江久、大江忠庵、大江達儀（雲澤）、また宇佐郡中津領若林村出身の安部原泉の名が記されている²⁰。

江戸詰の医師に関する史料は少ない。一八世紀後半の江戸における学塾の発展を考慮すると、藩士たちが江戸でも修行していたと考えるのが自然であるが、これまで確認できたのは文化一四（一八一七）年に大槻玄沢の芝蘭堂に入門した渡辺三折のみである²¹。

一九世紀中頃になると中津藩の動きはさらに活発になった。安政五（一八五八）年に福澤諭吉が江戸出府を命じられ、中津藩中屋敷に蘭学塾を開設した話は繰り返し伝えられている。文久三（一八六三）年以降には小幡杏平、和田克太郎、和田慎二郎、小幡篤次郎、小幡仁三郎、濱野丑之助、三輪光五郎、小幡貞次郎、服部浅之助、小幡弥、神尾久吉、古宇田松吉、佐伯左中らが江戸の中屋敷に赴いた²²。

嘉永四（一八五二）年に江戸で「五月塾」を開き、主に兵学を教えていた蘭学者・佐久間象山（一八一一～一八六四）

のもとには、同年に広瀬誠蔵、中西忠蔵、中西猪太郎ら一五名が続々と入門した。その中には奥平大膳太夫様御家来・恩田半五太郎と築由記という名も見られる。また、嘉永六（一八五三）年および翌安政元（一八五四）年のペリー艦隊の浦賀への来航に触発され、さらに一九名が五月塾の門を叩いた²³。

文化一四（一八一七）年に中津出身の大江元剛、大原信卿、大江貫恕が辞書『訳鍵』や『和蘭語法解』（文化九）で知られた京都の藤林普山に師事することになった²⁴。その他の京都への遊学事例はまだ確認できていないが、江戸に赴くにあたって京都で医師との接触や短期滞在を行うこともさほど稀なことではなかったと思われる。

三、長崎遊学

西洋の学問や技術に関心を持つ者にとって長崎は大変魅力的な遊学先だった。平松勘治『長崎遊学者辞典』には八二〇人の名が集録されているが²⁵、国内の在村蘭学者の数を考えると、遊学者の総数はそれより遙かに多かったと思われる。彼らは舶来のものや情報を入手し、同じ志を持つ遊学者たちとの交流によって全国各地の状況についても理解を深め、ときには終生変わらぬ親交を結んだ。一八世紀末頃からは京都、大坂、江戸にも蘭学塾が開設され、各地に新たな蘭学拠点が生じたが、長崎の輝きが色褪せることはなかった。

ヨーロッパ人医師から直接指導を受けることは容易ではな

かった。出島商館への出入りには長崎奉行の許可が必要で、阿蘭陀通詞を介しての指導には奉行と商館長両方の了解を得なければならなかったため、多くの場合、身分が高く広い人脈を持った藩主などの後ろ盾が必要だった。中津関連で一七世紀に直接指導を受けることができたのは上述の平田道巴の父・平田長太夫だけのようである。長太夫の指導を担当したのは一六六五年一〇月より二年間出島で勤務した下位外科医ライエン (Cornelisz de Layen) と翌一六六六年一〇月から病で亡くなる一六六九年一月九日まで上位外科医を務めたディルクス (Arnout Dircksz) だった。一連の写本に見られるように、ディルクスは多くの「弟子」に骨折と脱臼の手当て、創の縫合法、瀉血法および数々の膏薬方を紹介し、初期紅毛流外科の普及に大いに貢献した²⁶。

ほぼ同じ頃に出島の外にも新しい学習の場が現れた。一六五〇年代から歴代の商館医の通訳を務め、幕府や奉行所のためにそれに関する報告書をまとめていた阿蘭陀通詞の一部が私塾を開いて紅毛流医学を教えるようになったのである。一八世紀に入ると、とりわけ本木家、楢林家、吉雄家が収集していた医書、医療道具、治療薬、単語帳、洋書の抄訳、各種報告の写しなどが全国各地から注目を集めるようになった。遊学は成功すれば最新の知識を修得して帰郷できるが、常に大きな収穫を得られるとは限らなかった。旅費や滞在費の確保が遊学の成果を大きく左右した。福澤諭吉は中津藩下級武士の息子で、安政元(一八五四)年に長崎の光永寺や砲術家

山本物次郎の家に居候し、かろうじて食べるものには困らなかったが、入門するための資金がなく、医者の子の玄関でその門弟からアルファベットの読み方を教わった²⁷。

四、屋形家と屋形諸道

「屋形家系図」によれば、屋形家はもともとは宇佐大宮司家の宇佐守節(しゅせつ)に遡る家系である²⁸。宇佐氏は八代にわたって権大宮司職を務めながら、宇佐宮と関係の深い大根川神社の社司を兼務していた²⁹。一四世紀以降は神職から離れ、屋形と称するようになったとあるが、屋形米二郎文書によれば、一八世紀頃まで宇佐宮神官を務めていたようだ。現在の本耶馬溪地域にあたる豊前下毛郡曾木組西屋形村で医業を始めたのは屋形諸道である。文化三(一八〇六)年に死去した先代の屋形諸栄(かすけ)には嗣子がなく、養弟諸道が家督を相続した。諸道の称は養民で号は来徳³⁰。また、屋形家で医業を始めたときには梁という苗字を用いた。

「諸道 称養民号来徳始メ以医為業 以梁字訓屋形／室
株村³¹稲用氏女／文政九年十一月廿三日卒／諸文 称元
亨継医為業／室中津奥平臣廣瀬氏女／天保十一子九月三
日卒」。

この系図によれば、諸道は文政九(一八二六)年十一月二三日に死去している。天保一一(一八四〇)年に成立した

形地方で専門的治療を受けるのは困難だった。疫病が流行した際には感染の拡大と農業人口の減少を防ぐため、中津藩が請願に応じて医師を派遣したこともあったが、平時には病氣や怪我の対応は地元で任されていた。しかし、村民の教育水準の向上とともに専門的治療を望む声が大きくなり、藩と村民との間に立つ村役人らも対策を検討せざるを得なくなったことは容易に想像できる。青木歳幸の研究によれば他地区からの医師の「村方引請」⁴⁰は、屋形地方では困難だったようだ。諸道が屋形での開業を決意したのは、収入を得る目的よりも、屋形の無医村状態を解消しようとする責任感と奉仕精神によるものであったと思われる。

五、諸道にょる写本

年記や諸道の名称が示されている書物の大半は、楷書体の漢文と漢字仮名交じり文のものであるが、そのほかに楷書・行書が混ざった書体が用いられたものもある。とりわけ薬方を列記する際に欄外に付されている山型（△）と三角形（△）の印は、屋形家資料のその他の医書には見られない。異体字や略字は少ない。楷書体の写本に関して、「△」や「△」、「鑿⁴¹」、「風」、「疔」などに見られる横線と縦線の繋がっていない点や「女」、「卜」（こざとへん）などの特徴を元に、年記と名称のない写本の中にも諸道の筆写と認定できるものがある。

医学関連の最初の史料は明和四（一七六七）年に「成恒村」

で写された「医方思辨秘」および「医方思辨攷」（図二）である。この書は一八世紀初頭の豊後国の医者森村玄龍によるものであるが、国文学研究資料館の新古典籍総合データベースには書名、著者名のどちらも登録されていない。玄龍は病類別に一連の疾患を取り上げ、その病理と治療方法を詳細に述べている。各種の病に関する説明にあたり、玄龍は「眞氏」、「朋氏」、「朱氏」、「金匱」、「伝」、「易老」、「虞氏」などを参考にしている。



図二 「醫方思辨秘序」（二丁）

・「醫方思辨秘 全」（外題）一冊、三六丁（屋形家・五五）

一〜三四丁 「中風」、「烏藥順氣散」、「八味順氣散」、「雲林敗毒散」、「異功散」、「秘傳正氣散」、「川芎散」、「人參川芎散」

三五〜三六丁 「醫方思辨目錄／中風一 傷寒二 中寒三 瘧疾四 痢疾五 泄瀉六 咳嗽七 痰飲八 諸氣九 頭痛十 水腫十一 血症十二 淋疾十三

小便閉十四 面疾十五 口舌部十六 眼疾十七
 腹痛十八／／腹痛十九 癰疽廿 瘰癧廿一 楊梅瘡廿二
 婦人科廿三 子懸廿四 胎動廿五 産後廿六 小
 兒科廿七 驚風 發搐廿八 感冒廿九 泄瀉三十
 咳嗽三十一／／
 醫方思辨終／明和四亥二月日
 「裏表紙」 「屋形氏」

・「醫方思辨」(外題) 二冊三卷、(天) 一〇一丁、(地)
 一〇二丁 (屋形家・五四)

〔天卷〕

一～二丁 「醫方思辨攷序」

二丁 「于時正徳六歳在丙申中陽上澣端龍山室桑門知言

正徳六(一七一一)年」

三～丁 「醫方思弁卷之一／中風一 傷寒二 中寒三 中

暑四 霍乱五 中濕六 飲食七 内傷八 爵症九 瘧疾十

痢疾十一 泄瀉十二 咳嗽十三」

〔地卷〕

一丁 「医方思辨卷之三／眼疾一 結核二 梅樓氣三

癭瘤四 肺癰五 肺痿六 心痛七 腋痛八 腰痛九 脇痛

十 臂痛十一 痛風十二 背痛十三 脚氣十四 黄疸十五

癩疹十六 癰疽十七 瘰癧十八 金瘡十九 損傷二十 破

傷風廿一 便毒廿二 下痢廿三 楊梅瘡廿四 疥瘡廿五

癩瘡廿六 瘡瘡廿七 癩風廿八 殿風廿九 中毒三十」

一〇一丁 「森村玄龍述之」、「豊陽後医卒貞舎玄竜自書於
 成恒邑室」

卷頭で引用される「臨川呉氏」は、死後に臨川郡公に追封
 された元代中国の学者呉澄(一二四九～一三三三年)である。
 呉澄は『草廬集』や『易纂言』などを著した⁴²⁾。これらは医
 療に利用するためというより、儒学の勉強の一環として作成
 されたものであろう。



図三 「易学啓蒙切紙伝授」(巻頭)

・「易学啓蒙切紙伝授」⁴³⁾ (外題) 一冊、二五丁。(屋形家・

一三九)

〔見返し〕 「黒附総計二拾五枚 梁綏克紹」

一～二二丁 「河圖」、「往一圍三圖」、「往一圍四圖」、「井

田圖」、「八卦」、「南郭対極両儀四象八卦圖」、「文王八卦圖」、

「四季河圖」、「文王交易八卦圖」、「明著策第三」、「四聖人掛物圖」、「著箇図並臺圖」、「狀圖」、「木格圖」

二二〇二五丁 「九疇」、「明著策」

二五丁 「明和四亥丁秋／於成恒書／屋形以文諸道」

明和六（一七六九）年の春に作成された無題の一冊（屋形家・

五一）は「中風」、「感冒」などに用いる湯薬、丸薬、散薬について述べている。上述の「医方思辨」との類似点が見られるが、「瀧長庵傳」、「路安傳」、「小稲氏傳」、「亀塚都聞傳」、「上田氏傳」、「高屋惣兵衛傳」など幅広く集めた薬方も少なくない。巻末に地元の「棟形氏」によるものがある。

・【無題】一冊、七九丁（屋形家・五一）

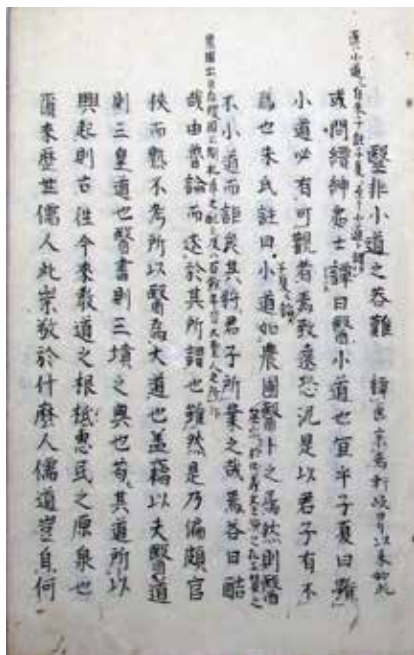
一〇二丁 「中風」（治療薬：「養荣通气湯」、「風順氣湯」、「順和丸」、「八味順氣」）

三〇七七丁 「感冒」、「傷寒」、「中暑」、「湿症」、「食傷」、「泄瀉」、「痢疾」、「痰飲」、「咳嗽」、「諸氣」、「喘急」、「積聚」、「頭痛」、「汗症」、「淋病」、「遺尿」、「黄疸」、「麻痺」、「血症」、「秘結」、「水腫」、「補益」、「虚勞」、「咽喉」、「眼病」、「鼻病」、「嘔吐」、「反胃」、「痞漏」、「鼓脹」、「梅核氣」、「痔漏」、「脱肛」、「腹痛」、「腰痛」、「通風」、「疝氣」、「消渴」、「丹毒」、「癰疽」、「癰疽疔」、「便毒」、「下疳」、「金瘡」、「破傷風」、「中毒」、「婦人」、「崩漏」、「血積」、「婦人虚損」、「血風」、「陰門諸痛」、「陰瘡」、「安胎」、「惡阻」、「子煩」、「子癩」、「子懸」、「子腫」、「子

氣」、「子淋」、「転胞」、「漏下」、「子動」、「傷寒」、「胎死」、「催生門」、「小産」、「産後」、「乳汁不通」、「乳癰」、「小児之部」、「雑胞之部」、「癩病一流 玄省傳」、「瘡毒一流 同傳」、「治疝氣方」、「小児要方」、「口中部」、「小児方」、「外科膏薬之部」、「淋病」、「虫下」、「霍乱之薬」、「唐瘡主方」、「・・・」 「癩痢」、「血留」、「金瘡油 上田氏傳」、「突目薬」、「咽氣妙薬」、「・・・」 「突目薬」、「疲癩瘡摺薬」

七八丁 「明和六巳丑孟春吉日／屋形以文諸道書」

七九丁 「家伝木香丸 中津棟形氏伝」、「通風主方 高屋惣兵衛伝」



図四 「脈訣」(二丁)

同じ時期に作成された「脈訣」(図四)では、数編の重要な医書を参照しており、「脈訣攷證」は、宋の医学者・崔嘉彦の『脈訣』とそれを整理した清の医官・王道純(?)

一六四四)による『脉訣攷證』に遡る。続きには明の医学者・趙繼宗による儒医の医道に関する記述⁴⁴および曲直瀬道三の『脉訣簡略』⁴⁵と「診捷脉訣」(一五八九)がある。一冊目は「三焦辨議」で終わり、二冊目は「五臟六腑之辨」である。

・「脉訣」二冊、四五丁・五一丁(屋形家・三五二)

〔二冊目〕

一丁 「醫非小道之苦難」

四丁 「終 全/脉訣攷證 全」、「脉訣非和書」

一三丁 「慈谿趙繼宗敬齋著述醫道」

二一丁 「脉訣簡略」

三〇丁 「診捷脉訣」

三八丁 「寔天正十七(一五八九)年 日陽洛下盍静翁

／三月吉辰日 雖知苦齋⁴⁶／道三撰之」

三九丁 「三焦辨議 全」

四五丁 「明和六戊丑三月吉日書 屋形以文諸道」

〔二冊目〕

九丁 「五臟六腑之辨序」

五一丁 「明和六戊丑四月吉辰」

抜粹や覚書が収録された「小兒科」(図五)では、とりわけ北宋の小兒科医・錢乙(一〇三三頃～一一一三)の名著『錢氏小兒直訣』に基づく「錢氏小兒証論拔書」が注目に値する。錢乙の本は明の医師・薛鏗による校註版が日本にも強い影響を与えた⁴⁷。同写本に見られる「防州山口府成恒種矩」につ

いては詳細不明である。興味深いことに同写本に初めて「阿蘭陀流」の薬方が現れる。



図五 「小兒科」(一丁)

五二丁

・「小兒科」(内題) 一冊、七二丁(屋形家・五二)

一丁 「小兒科」

二丁 「錢氏小兒証論拔書」

一〇十七丁 「小兒科」の定義、「小兒死証」、「兒死証十五候歌」

一八丁 「於防州山口府成恒種矩相伝の秘々密々書可慎千金万宝不如之可崇云云／天文三年二月日 種矩」

十九丁 「各種薬方」

六六丁 「阿蘭陀流」、「秘傳一乱膏」、「白膏」、「青膏」、「大乙膏」、「赤膏」

五二丁 「明和六日巳丑天首春吉日」

写本「小兒治方」は、牛糞を用いる家伝薬から、南蛮人がもたらしたタバコを混ぜ込んだ青膏や、漢方系の各種治療薬まで、その内容と用法を十二丁にわたって収録している。その続きに記されている「淋病ノ妙薬」などの薬方の多くは小児科とは無関係である。

・「小兒治方」(内題) 一冊、三五丁 (屋形家・二八六)

一丁 「小兒治方」(「小兒イエ薬」、「万録丸」、「青膏」、「瑠璃膏」、「赤膏」、「白膏」、「押薬」、「補心湯」、「唐瘡内薬」、「癩瘡内薬」)

二〜一四丁 「小兒科」(「五疳万病良方」、「肺疳」、「脾疳」、「肝疳」、「脾疳薬」、「肝疳薬」、「腎疳薬」、「消蟲圓」、「五疳薬」、「ヒセン瘡付薬(Ⅱ皮癬瘡付薬)」、「萬膏法流」、「秘頭膏」、「萬能膏」、「大市膏」、「城朱膏」、「萬應紫金膏」、「チリ膏」、「ヒセン瘡付薬」)

一四丁 「右秘密之一冊拙老一期之法傳進之者也

舒閑

于時明和六丑十月吉辰／右墨付紙十三枚」

一五〜三四丁 「淋病ノ妙薬」(「腫氣二八分心氣飲」)
三五丁 「切紙伝授終／屋形以文諸道」

諸道は明和八(一七七二)年五月に「灸法要穴」(図六)をまとめている。その底本の著者味岡三伯(一六二九〜一六九八)は、後世派別派を樹立した饗庭東庵(一六一五〜一六七三)に師事した京都の医師である⁴⁸⁾。著者名などの記載がない同様の写本が龍谷大学図書館に所蔵されている⁴⁹⁾。

・「灸法要穴」(内題) 一冊、一九丁 (屋形家・四三)

表紙裏 「灸法要穴」

一丁 「灸法要穴 味岡三伯撰／京師人也」

一〜一三丁 「取穴寸尺説」、「中指同身寸法」、「頭部一穴」、「胸部三穴」、「四花六穴」

一三丁 「灸法要訣穴畢／明和八辛卯歲皐月吉日」

十五丁 「病名語彙解卷四抜書」



図六 「灸法要穴」(一丁)

明和八（一七七二）～安永元（一七七七）年後半に完成した写本（屋形家・四九）で、諸道は「黄帝内经靈樞」および儒学者宇佐美瀧水（二七二〇）～一七七六が明和元（一七六四）年に刊行した荻生徂徠の「古文矩」⁵⁰について述べている。

・「黄帝内经靈樞」（内題）一冊、五二丁（屋形家・四九）

「表紙裏」 「明和八辛卯仲秋六日」

一丁 「黄帝内经靈樞卷第一九鍼十二原」[篇] 第二

三九丁 「靈樞終明和八年卯極月廿日」

「徂徠先生古文矩」

四七丁 「古文矩終 安永元年冬十一月十二日」

安永二（一七七三）年に諸道は京都に赴き、富小路二條上町の学舎で灸穴について学んだ。写本「灸穴定法 全」（四七）は、全身の灸点の場所を説明している。同名の底本の存在は確認できていない。

・「灸穴定法 全」（外題）一冊、二〇丁（屋形家・三四八）

一丁 「手太陰肺経十一穴」[・・・]

三〇丁 「于時安永二^{癸巳}三月朔日京師於富小路二條上町井

筒屋裏學齋寫之／梁信藏」（朱書）

安永四（一七七五）年に諸道は中津で藩の儒学者倉成龍渚に師事している。その年に作成された二冊の写本については



図七 「灸穴定法」（三〇丁）

大島明秀がすでに詳細に分析している⁵¹。「安永四年正月吉日 講主龍渚先生 詩經」（屋形家・三三八）の外題に「詩經」と記されているが、内容は南宋の朱熹が著した『周易本義』の注釈および「采藥漫筆」という本草を中心とした語彙集から構成されている。

「外療内治法」の上巻が紛失しているので全貌はわからないが、下巻の一九丁に「三因方」という宋の医書が示されており、この写本が宋の医師・陳言（字は無沢）撰『三因極一病源論』（一一七四年序、一八卷）に依拠していることがわかる⁵²。陳無沢は『素問』を解釈し直し、病気は内因、外因および不内外因のいずれかによって起こるといって「三因学説」を提唱した。内因は喜怒哀思悲恐驚という七情、外因は寒暑燥湿風熱の六因、不内外因は、飢餓、飽食、虎狼、害虫、金

瘡などである。それを基に内科、外科、小児科などの病気を記した『三因極一病源論』は数多くの処方提案し、広く注目を集めた⁵³。

・「**外療内治法**」下（外題、朱書き）一冊、二二丁（屋形家・三四九）

一〜二二丁 「風腫風毒風毒腫三段之論」、「氣腫」、「瘰癧馬刀瘡癭」、「瘰癧」、「便毒」、「妬清瘡」、「陰瘡之外治」、「丹毒」、「丹毒治例」、「疥癬」、「附骨疽 是脚氣ノ毒腫也」、「右治例」、「乳疾^付乳汁」治例」

二二丁 「安永四未四月下旬豊城於龍渚倉先生之宅書之」

大島明秀が分析した「医籍考」には日付が記されていないが、この典籍目録の写しは諸道が伝統医学に集中していた時期に作成されたはずである。京都大学富土川文庫にある同名の資料は、野津玄海という人物によるものである⁵⁴。日本医学会が一九三四年に開催した「歴史展覧會」の目録では「医籍考」は野津玄海の著者自筆本とされているが、それを裏付ける証拠は示されていない⁵⁵。

安永四（一七七五）年の秋頃に諸道は初めて肥前国の長崎を訪れたようだ。そこで目にした『病名彙解』（図八）は、元禄・享保頃に京都に居住していた儒医^{あしかわ}蘆川桂洲の著書である⁵⁶。現存するのは、七巻からなる底本の最初の二巻の写しのみである。

・「家伝病名彙解卷之一」（内題）、一冊、五四丁（屋形家・三八）

・「**家伝病名彙解卷之二 自不至須**」（外題）一冊、三〇丁（屋形家・三九）

三〇丁 「肥州^マ寄陽^マ寫田道頓碩／安永四未之孟秋写焉」



図八 「家伝病名彙解卷之二」（二丁）

安永五（一七七六）年に諸道は再び灸法について学んでいる。「必用灸穴秘訣」（図九）は古医方派の先駆けとして知られる名古屋玄医（一六二八〜一六九六）が延宝六（一六七八）年に仕上げたものである。同じ書名と奥書の写本が東京大学にある⁵⁷。

この安永五（一七七六）年より諸道は本格的に西洋医学を学んでいる。「必用灸穴秘訣」に続く「癰疽礙壓論」は、伝

統医学とは異なり「陰陽虚実を論じない崎陽瘍医」による癰疽の治療について述べたものである。



図九 「必用灸穴秘訣」(一丁)

著者の「堀山榊林哲伯」は(二代)榊林栄哲(一七三七～一七九七)である。名は高茂、字は伯由、号は堀山。彼は松浦吉重の次男として生まれたが、早くに父を失い、初代栄哲の養嗣となった。蘭書と漢医方の書に精通し、門弟が八〇余人もいた。寛政三(一七九一)年から、隠居の身となった寛政八(一七九六)年まで、長崎の鍋島氏屋敷の出入り医師および佐賀藩御番方療治掛を務めた。著作として「榊林経験録」

と「和蘭流膏薬方」が伝わっている⁵⁸。長崎で諸道が榊林栄哲と出会っていることも考えられるが、栄哲の「癰疽礙壓論」(図一〇)は安永四(一七七五)年に書かれたもので、諸道の写本はその翌年に大通詞吉雄耕牛の家塾成秀館で作成されている。



図一〇 「癰疽礙壓論」(一丁)

・「必用灸穴秘訣」(内題) 一冊、五六丁(屋形家・四〇)
 一、四二丁 「必用灸穴秘訣」(「定大推法」)、「人神」、「長病日」、「瘰癧神」、「扁鵲死日」、「針灸善凶日」、「相天時」、「忌癒物房勞」、「製艾葉」、「艾炷大小」、「狀壯數」、「取艾火法」、

「點灸法」、「灸補瀉」、「阿是穴」、「發灸瘡」、「洗灸瘡」、「貼灸瘡」、「保養」、「定髮際法」、「頭面部」、「喉胸心腹部」、「臍下部」、「背部第二行」、「背三行」、「肩肘手腕部」、「脚腿部」
四二丁 「延宝六年^{戊午}自二月廿一日／至三月七日畢

名古屋玄醫撰

四三丁 「安永五年^{甲申}五月二日写焉羅山梁來徳」

四三〇四五四 「称呼惣名」

四五〇四九丁 「癰疽礙壓論」

四九丁 「安永四年^{未年}秋九月／崛山栖林哲伯由甫撰」⁵⁹

五〇丁 「安永五次^{丙申}年夏六月念四日／長崎吉雄先生於學室瀉焉」

成秀館で作成された無題のもう一冊（屋形家・五二六）は破損が大きいが、その内容の大半は確認できる。「紅毛流膏藥之書」は主な軟藥（インクエンテ、ポルトガル語 unguento）と膏藥（エムフラスト、ポルトガル語 emprasto）を収録している。「羅転韻」（図一一）はラテン語とオランダ語の医学用語集である。見出し語はカタカナで表記されている。それに続く「紅毛二十五横文字」は筆記体とブロック体のABCと各文字の読み方を紹介している（図一二）。「阿蘭陀水藥調合書」はチンキ剤（テンキテウル、オランダ語 tinctuur）、薬用蒸溜酒（ア、クワ、ラテン語 aqua および）、（エ）レキス、ラテン語 elixir）などを収録している。

・「無題」（「紅毛流膏藥之書」「羅転韻」、「紅毛二十五横文字」、

「阿蘭陀水藥調合書」一冊、四一丁、破損が多い（屋形家・五二六）

一丁〇一八丁 「紅毛流膏藥之書」（「インクエンテアルテイヤ」、「インクエンテムアルテイヤコンホシイ^{破損}」、「インクエンテムハシリコン」、「インクエンテムアトアムベスタア」、「インクエンテムテキステヒイヨム」、「インクエンテムレフレケレンスカレイ」、「インクエンテムヒユスコム」、「インクエンテムエケヒシヤコム」、「インクエンテアルホムカンフラ^{破損}□□」、「インクエンテムアウリンヨン」、「インクエンテムホリイコフ^{破損}□□」、「エムフラストテヤキロンコムミス」、「エムフラストテヤホンホリコス」、「エムフラストコミイニイ」、「エムフラストツムスラキニフス」、「エムフラストラシコロラセヨム」、「エムフラストアラニス」、「エムフラストメリクリウス」、「エムフラストテサホウネス」、「エムフラストハジリコム」、「エムフラストミイニイ」、「エムフラストステキテコム」）

一八丁 「安永五丙申仲春穀旦⁶⁰長陽於／吉雄先生學堂寫焉」

一九〇二〇丁 「治火傷之法」、「頭髮焼テ毛不生時」、「柳膏」

二一〇二五丁 「羅転韻」

二六丁 「紅毛二十五横文字」

二七〇四〇丁 「阿蘭陀水藥調合書」（「テンキテウルラフメント」、「カンフルフラントエン」、「テンキテウルテリヤ、カ」、「テンキテウルエ^{破損}□シイ」、「テンキテウルアロエス」、

「ア、クワセルウサ」、「ア、クワメリクリユス」、「ア、クワロミノウサ」、「ア、クワヒツテリヨウリイ」、「スヒルテスユステム」、「ア、クワスヒルテス」、「エレキストルフルリメアテス」、「テンキテエルコロウシイ」、「シヘレタアヲ、リイ」、「スヒイユルテマテリカアリス」、「テンキテイラルアロス」、「エレキストルフルリメアテス」、「ア、クワメリクリユスノ代薬」、「ヘルフスエスカル」、「アセイイチイロサアシイ」、「ア、クワセルウサ」、「ア、クワロサアロム」、「鶴膝風蒸法」⁶¹、「洗方」、「毒蛇妙方」、「阿蘭陀ヘリフス」、「洗目散」、「金瘡ハルサン」、「赤白癩風」、「ヘトウニカ」

四一丁 「梁養民叔恵」



図一一 「羅転韻」(屋形家・五二六)



図一二 「紅毛二十五横文字」(屋形家・五二六)

写本「紅毛流⁶²金瘡跌撲療治伝」の原書は榊林鎮山(一六四九〜一七一)の「金瘡跌撲」である。一六五〇年代に始まった歴代の出島商館医による医学教授や治療活動に若い頃から立ち会っていた鎮山は、西玄甫(？〜一六八四)や本木良意(一六二八〜一六九七)と共にいわゆる通詞蘭学の先駆けだった。鎮山は一六世紀のフランスの外科医アンブローズ・パレの『Chirurgie (外科学)』や一七世紀後半の数々の通詞報告を基に「紅夷外科宗伝」⁶³という力作を執筆し、広く注目を集めた。福岡藩の本草学者で儒学者の貝原益軒は著者鎮山を讃える序文を寄せ、多数の絵図を含む鎮山の手稿は、印刷されないまま榊林塾の門下生らを通じて広まり、吉雄耕牛にも大きな影響を与えた。

「金瘡跌撲」に続く「紅毛薬能」はメイラ (Myrrha)・サンキタラコウネス (Sanguis Draconis) などの生薬および様々な基剤をもちいて調合される油薬、軟膏、膏薬などの効能について述べている。

・「紅毛流金瘡跌撲療治伝」(内題)、一冊、四九丁(屋形家・四一)

一丁 「紅毛流金瘡跌撲療治伝」

一〜三四丁 「大抵」、「血止め」、「ホツシ」、「インクエン
ト」、「木綿」、「頭面之部」、「缺唇療治之事」、「頸之部」、「胸
背之部」、「腹腋之部」、「腰脇之部」、「手足之部」、「付薬之方」、
「ラウメントノ方」、「摠身之部」、「ハツハスノ方」、「粉薬
之方」、「内服之薬方」、「血止外敷之方」、「ヲ、リヨヨサア
ロン製法」、「セウフヒヨウラスノ製法」、「メリロウサロン」、
「レンスウイン」、「膏薬之部」、「インクエントテキステヒ
イ」、「インクエントホツホウリヨム」、「インクエントスツ
テリトン」、「エンフラストデベンスイブン」、「エンフラス
トベトウ」、「エンフラストテヤハルマテスリイトン」、「ア、
クワニキラセンヒライキスノ方」、「インクエントデヤホミ
イトス」

三四丁 「安永五^丙季春／長崎於吉雄先生学室寫焉」

三六丁 「雜記」

三六丁 「紅毛薬能」

三六〜四九丁 「メイラ 没薬」、「ホ、トル 牛乳汁製」

「サンキタラコウネス 麒麟血」、「サンフ、シ タツノ木」、
「ヘルハヒヨウルム 駒引き草」、「リンフリコウウルン 蚯
蚓」、「コロウクス サフラン紅花制」、「セルウサ 唐土」、
「セイメンヘニケレシイ 胡蘆巴」、「セイメンリイネ 胡
麻仁」、「フロウリスカモメリ 野菊花」、「ヘントウサ 龍
腦油」、「ヲ、リヨカンフル 百合花油」、「ヲクリカンキリ」、
「アキソソキヤホル、シイ 家猪油」、「アルケンテイヒイ
ヒユム水銀」、「テリヤアカ 紅花煉薬」、「ホウリスアルメ
ニヤ アメリカ國ノ赤土也」、「ヲ、リヨラウリイネ ツ、
ノ木ノ葉ヨリ取」、「ヘレシヒタアト 合物」、「フロウリス
マテリカアリヤ 夏草」、「アニイテムム 茴香香」、「トウ
リス 乳香」、「フロウリスアプセンテムム 川原芥葉」、「ソ
クスニイ 琥珀」、「アキリモウニヤ 鹿燒草」、「ヒイクス
唐柿」、「ヲ、リヨヒツテリヨウロム 膽矾油」、「カツヒイ
リユスヘネエリユム 鹿尾草」、「ステイラツキスカラミイ
タ 紫姜」、「インクエントテヤホンホリイゴス」、「ヘリプ
スシチリイナ」

安永五(一七七六)年の秋に作成された「雜記」(図一三)は、
各種疵、兎唇などの外科処置およびいくつかの薬方を収録し
ている。



図一三 「雑記」(二二丁)

・「雑記」(内題) 写、一冊、五〇丁(屋形家・四五)

一〇五〇丁 「焼所之治方」、「焼所目之療治」、「焼所水ト
レ乾時ノ療治」、「目ノ焼所治」、「腐肉ノ切方」、「重舌ノ
治」、「鉄炮疵ノ治」、「兎口ノ療治」、「酒查鼻ノ療治」、「目
ヲ切明ル方」、「耳ヲ切明ル方」、「陰頸ツマリタルノ治」、「陰
門ヲ切明ル治」、「肛門ヲ切明ル治」、「テンキテユルメラノ
方」、「インクエントテリイトム」、「ハルサムヒイタア」、「胸
ノ痛ニ附ル膏薬」、「ヘレシヒタアトノ代ニ遣方」、「ハルサ
ムヘネラアルム」、「血止之方」、「脱肛ノ妙薬」、「エキスタ
ラクテムカトリイコム」、「ソツヒル拵様」、「皮ヲ生スル
方」、「レイム」、「諸腫物疔瘡ノラウメント」、「生肉ヲ育ル
方」、「疔瘡附薬」、「疔瘡ノラフメント」、「メリクリヤース

サルフ」、「焼所ノ治」、「目ノ焼所」、「疱瘡ノ治」、「疱瘡目
ニ入タル治方」、「張満ノ治方」、「逆咳ノ治方」、「靈丹焼様」、
「膿ノ見様」、「脱肛ノ治方」、「肛門ノ痒痔」、「肉ヲ生スル
方」、「癩病ノ治方」、「口中ノ痛治方」、「便毒ヲ引立ケ治ス
ル方」、「ヲ、リヨムコロウシイ」・・・「エスカルノ方」、
「血泊ノ方」、「血ノ見様」など、「口中痛妙薬」・・・「ラ
ウチャウ」、「腐骨疽ノ治方」、「ヘコンフラツテン」、「下薬」、
「疵ノ見様」・・・「ヘーテヒユル」

五〇丁 「雑記終 安永五年^丙秋九月十八日崎陽於西山写焉」
「阿蘭陀油之書」(図一二) は油薬とその製造法を取り上げ

ている。その内容のほとんどは一七世紀の初期紅毛流外科を
反映したものである。輸入される医薬品は高価な上に供給
が不安定なことが当初から問題視されており、幕府は寛文
七(一六六七)年に両長崎奉行を通じて東インド会社に対し、
將軍と老中の名において薬草の種や苗、また蒸留器一式と薬
草や蒸留技術に精通する専門家の派遣を求めた。交易条件の
改善を念頭に、オランダ東インド会社は翌年から幕府の求め
に応え、寛文一一(一六七二)年には経験豊富な薬剤師フラ
ンス・ブラウンが日本へ派遣された。幕府の経費で出島の敷
地内に建造された「油取家」でブラウンが薬油の蒸留を開始
し、その一部は献上品として江戸へ送られた。阿蘭陀通詞中
嶋清左衛門、名村八左衛門、榎林新右衛門(鎮山)、立石太兵
衛、本木庄太夫、加福吉左衛門が作成した報告には、単純な
蒸留法から七日間を要する複雑な樟脳油などの製造方法の説

明のほか、大型の釜、冷却装置、各種の容器など器物の図も見られる。報告の写しは「阿蘭陀油道具寸法之図并煎方書」、「阿蘭陀薬油製法并図」、「蘭法制薬方」、「製油功能図記」など様々な書名で十九世紀まで流布しており、その一部は板本に収録された⁶⁴。諸道の写本にもこの「合油九色」の製造法が記されている(図一一)。



図一四 「阿蘭陀油之書」(二二二丁)

・「阿蘭陀油之書」(内題) 一冊、五七丁(屋形家・二二八)
 一〇一六丁 「ヲ、リヨロウサ」、「ヲ、リヨカモメイリ」、
 「ヲ、リヨアルテイヤ」、「ヲ、リヨシクテイヤ」、「ヲ、リ

ヨイヘリシ」、「ヲ、リヨヒヨウラス」、「ヲ、リヨレリヨウ
 ロン」、「ヲ、リヨサンホウシイ」、「ヲ、リヨメント」、「ヲ、
 リヨアフセンテ」、「ヲ、リヨアニイシ」、「ヲ、リヨアニテ」、
 「ヲ、リヨスカアク」、「ヲ、リヨテレメンテイナ」、「ヲ、
 リヨア、ルト」、「ヲ、リヨヘイテレ」、「ヲ、リヨカンフ
 ル」、「ヲ、リヨスクシイネ」、「ヲ、リヨトウセス」、「ヲ、
 リヨセイラ」、「ヲ、リヨメルテロウスン」、「ヲ、リヨロウ
 イネ」、「ヲ、リヨシナモミ」、「ヲ、リヨアネツヘレ」、「ヲ、
 リヨヲハアロン」、「ヲ、リヨセンシイフン」、「ヲ、リヨホ
 ス」、「ヲ、リヨタアス」、「ヲ、リヨカアノ」、「ヲ、リヨア
 ルイト」、「ヲ、リヨホロンヘイ」、「ヲ、リヨコルテシツヒ
 シイテレ」、「ヲ、リヨリイニ」、「ヲ、リヨロサアト」、「ヲ、
 リヨヒツテルヨウリウ」、「ヲ、リヨスルフル」、「ヲ、リヨ
 キヨノ、メス」、「ヲ、リヨセントヘイ」、「ヲ、リヨリンフ
 リコウリオン」、「ハルサモ」、「ヲ、リヨムスラキニフス」、
 「ヲ、リヨムカキヌン」、「ヲ、リヨソラアトロン」、「ヲ、
 リヨヒイテ」、「ヲ、リヨモントウニ」、「ヲ、リヨイヘリセ
 イネイヒ」、「ヲ、リヨヘンケレコイレ」、「・・・」
 一七〇二二丁 「テレメンテイナノ油」、「蜜柑ノ皮ノ油」、
 「丁子ノ油」、「ロウスマリイナノ油」、「肉荳蔻ノ油」、「イ
 ノンドノ油」、「茴香ノ油、ソナレ松ノ油」、「樟腦ノ油」、「・:
 二二丁 「右都合油九色 右油之効能並油取様之仕掛則今度
 出島ニテ油取申候阿蘭陀人私共ニ相伝候以上」
 二三〇三三丁 「金瘡之書」 「頭之疵」、喉之疵事」、「胸

之疵事」、「腹之疵事」、「第二穴ノ留事」、「血ノ走ニ所ニ依テ手ニテ結ニ心得有事」、「第三内葉順血湯事」、「第四疵洗事」、「洗心得之事」、「頭ノ疵洗様」、「疵ヲ縫中」、「焼酎毎日時之心得之事」、「第五疵ニヨリ鉸用事」、「骨ノ切タル疵」、「・・・」、「第六疵縫事」、「腹腸出疵縫事」、「メイチャヲ指心得」、「・・・」、「雌卵薬之事」、「雌卵黄白ノ事」三三丁 「阿蘭陀伝合油法」 「ヲ、リヨムカキヌム」、「ヲ、リヨムリンフリコウリヨム」、「ヲ、リヨムヲリハアヌム」、「ヲ、リヨムミレヘノタア」、「ヲ、リヨ、イライロオモ」、「ヲ、リヨカモメリ」、「ヲ、リヨイツヘリシ」、「ヲ、リヨロサアロム」、「ヲ、リヨコロウシイ」、「ヲ、リヨムテルアラ」、「ヲ、リヨマステイキス」、「ヲ、リヨムヘルネアラム」、「バルサルムヒイタア」、「油取様」三四丁 「金瘡之部」 「雑記」

「雑書」(屋形家・四二)は「必要灸穴必見」および「灸法要穴」と同様の茶色の表紙の横本であり、筆跡も完全に一致しているので、諸道が長崎遊学中に作成したものに違いない。

諸道は一七世紀の西洋医学関連の重要な和文資料も読んでいた。五丁目から始まる「證治指南」のもととなったのは、紅毛流外科が誕生する一七世紀半ばに作成された報告書である。明暦二(一六五六)年に長崎在住の高名な儒医向井元升(一六〇九〜一六七七)は、大目付井上筑後守政重の依頼で出島商館医「アンスヨレアン」(Hans Juriaen Hancke) およ

びその後任の「ステイビン」(Steven de la Tombe)と接触し、西洋外科術に関する報告をまとめた。その教授に基づいて誕生した報告書は「阿蘭陀伝外科類方」⁶⁵、「阿蘭陀外科医方」、「證治指南」⁶⁶など様々な写本として後世に伝わった。「證治指南」は、寛文一〇(一六七〇)年に刊行された『阿蘭陀外科良方』により早くから広まっていたが、この写本を用いた伝習は一九世紀まで続いた。向井元升は西洋医学に関する情報をほぼそのまま取り入れながらも、病理学に関する出島商館医の説明を中国系の教義をもとに解釈して同化させた。元升の報告は医師による初の紅毛流外科関連の書であるとともに、西洋医学の「折衷的受容」の典型と言える⁶⁷。諸道の写本は「癰疽陽症」、「癰疽陰症」について述べた部を写した上で、数々の癰疽の特徴とそれについての商館医の説明の部からいくつかを選び、最後にその他の情報源から得た腫瘍なども付け加えている。

短い「南蛮流外科直伝」の出典は不明である。それに続く「萬外集要小切紙目錄下」と「山本流七氣湯」は、山本玄仙(生没年不詳)が元和五(一六一九)年に京都でまとめた『万外集要』を参考にしたものである。玄仙は一六世紀末頃の金瘡医で、戦国時代から発展してきた金瘡治療と南蛮人から得た知識を合わせ、各種腫瘍、疵、打撲の治療およびタバコや南アジア産の椰子油などを用いた治療を記している。彼の著書は紅毛流外科学に対する関心が高まる一六四〇年代以降少なくとも三回にわたり再版された。諸道はその内容の一部の短

い概要のみを記している。

- ・「雑書」(内題)、一冊、五三丁(屋形家・四二)
- 二丁 「雑書」「テレメンヲ作法」、「荒木酒方」、「ロウスワトル」、「白丹 作法」、「突目妙」、「テレメンヲ作法」、「・・・」
- 「サルアルモニヤアレシイ」、「ヘルサム作法」、「阿片作法」、「王染傳」、「・・・」
- 「小児ノ頭瘡」、「帯下」
- 五丁 「証治指南」／「癰疽陽症」
- 六丁 「癰疽陰症」
- 八～三三丁 「石疽之地方」、「附骨疽」、「多骨疽」、「石榴疽」、「綬疽」、「肺癰」、「腸癰」、「肉癰」、「赤白帶下」、「筋渡方」、「焼ト」、「腋臭」、「・・・」
- 「瘦瘤」、「白癩」
- 二二丁 「南蛮流外科直伝」
- 二四丁 「赤糸疔」、「膈性活ス治」
- 二五丁 「萬外集要小切紙目録下」
- 「山本流七氣湯」
- 二六～二八丁 「七氣諸勘弁」
- 二九～五二丁 「七氣薬性拵様口傳」
- 五三丁 「スペレンケル／宝曆四年ニ来朝ホーユトイテト云所ノ人也出島エ在館

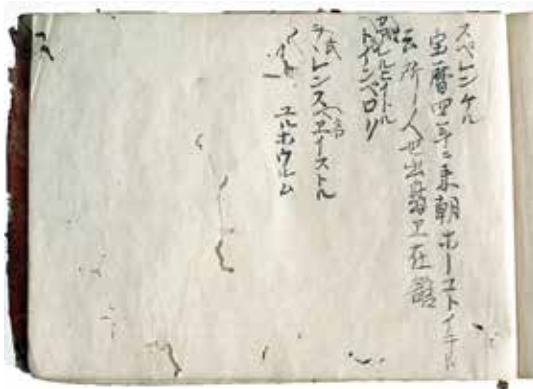
姓 カアレルヒイトル

名 トインベルロリ

氏 ヲ、レンスヘエイストル

名 ユルホウルム

興味深いことに巻末に西洋人医師の名が記されている(図一五)。ドイツ・マイセン・ハイム (Meißenheim) 出身の「スペレンケル」(Karl Gabriel Springer、シュプリンガー)という外科医は宝曆四(一七五四)年より三年間出島商館で勤務していた。商館日誌などの東インド会社の文献ではほとんど言及されていないが、安永年間になっても「スペレンケル」の名が記録に残されていることから、治療や医学の教授において印象深い人物であったと思われる。



図十五 「雑書」(五三丁)

「カアレルヒイトル トインベルロリ」⁶⁸は安永四(一七七五)年八月より翌年の一月まで出島商館で勤務したスウェーデン人医師で博物学者のカール・ペーター・ツン

ベルク（ツェンペリー）（Carl Peter Thunberg, 1743-1828）である。同時期に諸道も長崎の成秀館で勉学に励んでいた。ツェンペリーは一人の奴隷⁶⁹を伴い、わずか一年あまりの短い滞在であったが、小通詞茂節右衛門や大通詞吉雄耕牛と親交し、とりわけ梅毒に対して昇汞⁷⁰を処方する水銀療法を伝授したことで注目を集めた⁷¹。

「氏ヲ、レンス名エイストル」はドイツの解剖学者で外科医のローレンツ・ハイスター⁷²（Lorenz Heister, 1683-1758）である。彼が一七一九年に刊行した『Chirurgie（外科学）』は大学における外科学の地位を著しく高めた。吉雄耕牛は日本へ伝わった蘭訳書『Heelkundige onderwijzingen（外科学教育）』（一七四一）と『Kort begrip der heekunst（外科学概要）』（一七六四）の抄訳や要約を行なった。後に、大槻玄沢、越邑德基、羽栗長隠、桐亭社中が作成した『瘍医新書』、『瘍科精選図解』、『瘍科精撰図符』、『協乙斯的盧産論』などを介し、ハイスターの名は「協乙斯的盧」、「歇伊私的兒」、「刺烏冷斯回私的尔」としてさらに広まった⁷³。

「ユルホウルム」の意味は不明である。

六、視野を広げる医学修行

屋形諸道の少年時代や彼が当時受けた教育については不明である。その頃は中津町の藩校もまだなく、地元の寺子屋で読み書きと算盤を覚えるなどしたのち、豊前・豊後地方の儒学者に師事することになったと思われる。

一七六〇年代後半に諸道が医学を学ぶことになった際には、藩からの何らかの許可が必要だったはずである。おそらく当初は農作業などの方割に藩領内やその近辺で教示を求めたのだろう。彼の学習内容を示す最も古い資料は、明和四（一七六七）年に「成恒村」で写された「医方思弁拔」、「医方思弁」および「易学啓蒙切紙伝授」である。当時諸道は二二歳だった。「医方思弁」の序文と奥書によれば、この医書は正徳六（一七一六）年に豊後の医師森村玄龍の教えをまとめたものである。玄龍は主として中国の重要な古典である『金匱要略』や、南宋の儒学者真德秀、虞氏と朱氏の易学を参考にしており、易学を踏まえた中国宋代の医学を教えていたようだ。玄龍の名を示すその他の資料の存在は確認されていない⁷⁴。

その二年後の明和六（一七六九）年の春に作成された写本（無題、屋形資料五一）は、湯薬、丸薬などの処方および感冒、傷寒、中暑などの疾患について述べている。「瀧長庵傳」、「路安傳」、「小稲氏傳」、「亀塚都聞傳」、「上田氏傳」、高屋惣兵衛伝の「通風主方」、「中津棟形氏」の薬方は九州の東部で記録したものである。同年六月に写された「小児科」は、主として錢乙著『錢氏小兒直訣』の治療法を述べながら、初めて「阿蘭陀流」医療に言及している。「小児科」の写本に残された天文三（一五三四）年の「山口府」の記述の背景についてはまだ解明されていない。明和六（一七六九）年四月に完成した写本「脉訣」とその二ヶ月後の「脉論 頓醫抄」は、

脈診関連の重要な中国典籍を継承するものである。諸道は小児病にも強い関心を寄せていた。小児病の処方は、牛糞など地元の「資源」を活かした民間薬、南米から導入されたタバコ、中国医書から取り入れた漢方処方を列記する折衷的な内容である。「灸法要穴」と「灸穴定法」で述べられた灸法は、収入が少ない農村に適した安価な治療法である。「灸穴定法」は諸道が安永二（一七七三）年に京都で作成したものである。滞在期間が短かったためか、京都で作成されたのはこの写本のみである。

安永四（一七七五）年に諸道は中津で藩の儒学者倉成龍渚に師事していた。龍渚は中津藩儒・藤田敬所けいしよおよび京都の古学派の儒学者伊藤東所とうしよに学んだ後に中津に帰郷し、安永元（一七七一）年に藩儒となった人物である。諸道は龍渚が自宅で開いた学塾で儒学とともに陳言流の外科学と本草学を学んでいた⁷⁵。

当時の中津藩医のうち、前野良沢（一七二三～一八〇三）は一際優秀な蘭学者だった。藩主奥平昌鹿によって高く評価され、本来の職務を放置するほどオランダ語の勉強と蘭文の解読に没頭した良沢は、やがてドイツ人医師クルムスの解剖学書『*Ontleedkundige Tafelen*』の翻訳事業の大半を担った。良沢は江戸や中津の医師たちに強い刺激を与えたはずである。安永三（一七七四）年に刊行された訳書『解体新書』には良沢の名は長崎の通詞学者・吉雄耕牛が書いた序文にしか見られないが、良沢の功績は関係者の間では知られていたに違

ない。藩主の理解と支援もあり、中津藩内では西洋医学に対する興味が高まった。屋形諸道が安永四（一七七五）年に長崎に向かったのは、このような状況と無関係ではないだろう。

諸道の長崎滞在は約二年間だった。写本の奥書で吉雄耕牛が倉成龍渚と同様に「先生」と呼ばれていることから、諸道は耕牛の家塾成秀館で本格的な教えを受けたと考えられる。吉雄邸は刺激に満ちた魅力的な場所だった。舶来の家具、書籍、医療道具、望遠鏡、顕微鏡などの「珍品」は広く注目を集め、医学、天文学、地理学、本草学などに関する海外の知を求める訪問客や入門希望者が絶えることはなかった。当時は西洋の内科治療に関する学修はまだ本格化していなかったが、外科学の受容が始まってからはすでに一二〇年が経っていた。

ちょうど諸道が一に長崎に滞在していた時期に、後世に「出島の三賢人」の一人として讃えられるツンベルクが長崎に到着した。歴代商館医の中でも彼は特に優れた経歴の持ち主だった。しかし諸道のような一介の遊学者で、無名の地方出身者が商館員と接触することは到底不可能だった。出島からの学術情報などは阿蘭陀通詞を通してのみ伝えられ、ある程度の「情報管理」も当然行われていた。塩化第二水銀を持参したツンベルクは吉雄耕牛らに梅毒（梅毒）に対する水銀水療法を教えたが⁷⁶、諸道の写本にはこのような最新の治療は記されていない。耕牛は一七世紀の紅毛流医書を基礎にしなから、ハイスターの『外科学』からの薬方や外科術を選択的

に紹介していた。

安永五（一七七六）年に諸道は長崎を去った。その後の医学修行をうかがわせる写本はない。帰郷後に彼は村の役人を務めながら医師としても活動するようになった。

城下町の藩医の経歴を見ると、ある程度の名がある師の門下生となり、師の流儀を継承することが多い。それに対し、宋代以降の中国医学から南蛮・紅毛系医療まで特定の流派に拘らずに、有用な治療法と医薬品を追究したようだ。また、いくつかの書簡からは、諸道が藩の儒学者倉成龍渚や日本で最初の本格的中国料理の解説書『卓子式』^{（しほくしき）}を著した中津町の外科医田中信平（一七四八～一八二四⁷⁷）と親交を持つなど、藩内の知識人としての社会的地位を得ていたことがうかがえる。こうして耶馬溪地方の農民は、長い修行期間を経て東西両洋の医学の基礎を身に付け地元のために働く村医による専門的な治療を受けられるようになった。

参考文献

- ▲青木歳幸「佐久間象山門人録『及門録』再考」。『信濃』第 四八巻第七号、信濃史学会、一九九六年。
- ▲青木歳幸『在村蘭学の研究』、思文閣、京都、一九九八年。
- ▲赤松翠陰編『倉成竜渚先生遺稿―附・藤田敬所先生遺稿』中津、後凋閣、一九三六年。
- ▲板沢武雄『日蘭文化交渉史の研究』東京、吉川弘文館、一九五九年。

▲今永正樹『医も亦自然従う―村上医家事歴志』村上記念病院・村上医家史料館、中津、一九八二年。

▲大島明秀「屋形家と中津藩儒倉成龍渚―写本「外療内治法」を中心に―」。『中津市歴史民俗資料館分館 医家史料館叢書』第七巻、中津市教育委員会、二〇〇八年。

▲大島明秀「耶馬溪屋形家と「鑿籍考」」。ミヒエル・ヴォルフガング、吉田洋一、大島明秀共編『人物と交流Ⅳ』中津市歴史民俗資料館分館 医家史料館叢書Ⅳ、二〇一五年、一～三七頁。

▲緒方富雄編著『緒方洪庵適々斎姓名録』大阪、適塾記念会、一九六七年。

▲緒方正清『日本産科学史』東京、霞ヶ関出版（発売）、一九八〇年。

▲海原亮『江戸時代の医師修行―学問・学統・遊学』吉川弘文館（歴史文化ライブラリ一三八九）、東京、二〇一四年。

▲賀川明孝編著『賀川玄悦の系譜とその周辺』〔賀川明孝〕、一九九五年。

▲川寫真人『医は不人の術、務めて仁をなさんと欲す』中津、西日本臨床医学研究所、一九九二年。

▲川寫真人「大江玄仙の栗崎流金瘡外科免許状について」『日本医学雑誌』第五一卷第二号、二〇〇五年、一八二～一八三頁。

▲京都府医師会編『京都の医学史』京都、思文閣出版、一九八〇年。

▲熊谷克己「田中田信」上・中巻、一九二二年跋。中津郷土塾編『豊前中津 田信傳』、中津大神宮、二〇〇〇年、一五〜一〇〇頁。

▲呉秀三『華岡青洲先生及其外科』京都、思文閣出版、一九七二年。

▲古賀十二郎『西洋医学伝来史』、東京、形成社、一九七二年。

▲古賀十二郎『長崎洋学史（下巻）』長崎文献社、一九七三年。

▲宗田一『図説・日本医療文化史』京都、思文閣出版、一九八九年。

▲高橋文「日本におけるファン・スウィーテン水の受容」『日本医学雑誌』第四八巻第二号、二〇〇二年、五七五〜五九四頁。

▲武田科学振興財団杏雨書屋編『医家肖像集―杏雨書屋所蔵』（初編）武田科学振興財団、二〇〇八年。

▲富田修司「耶馬溪屋形家とその資料について」。『中津市歴史民俗資料館分館 医家史料館叢書』第六巻、中津市教育委員会、二〇〇八年、一〜六頁。

▲中津市史刊行会編『中津市史』、中津、中津市史刊行会、一九六五年。

▲平松勘治著『長崎遊学者事典』溪水社、広島、一九九九年。

▲福沢諭吉『福翁百話 福翁百餘話』ダイヤモンド社、一九七八年（明治経営名著集完全復刻版）。

▲福田殖「呉澄小論」『九州大学文学論輯』第三二号、一九八六年、一七〜四六頁。

▲細田富多「大江医家史料館の文書史料より（一）」ミヒエル・ヴォルフガング編『中津市歴史民俗資料館分館医家史料館叢書VI』、二〇〇七年、八六〜九〇頁。

▲真柳誠「『儒医精要』解題」。馬継興、真柳誠、鄭金生、王鉄策『日本現存中国散逸古医籍の伝承史研究利用和発表（第1報）』一九九七年、一七〜一九頁（日本国際交流基金アジアセンター助成報告書）。

▲ミヒエル・ヴォルフガング、大島明秀、吉田洋一「耶馬溪屋形家の系譜」『史料と人物II』（中津歴史民俗資料館分館 医家史料館資料叢書VIII）、中津、二〇〇九年、一〜一〇頁。

▲ミヒエル・ヴォルフガング「植林新右衛門（鎮山）―外科医になった通詞」、ヴォルフガング・ミヒエル・鳥井裕美子・川寫真人共編『九州の蘭学―越境と交流』京都、思文閣出版、二〇〇九年、三四〜四〇頁。

▲ミヒエル・ヴォルフガング「初期紅毛流外科と儒医向井元升について」（『日本医学雑誌』第五六巻第三号、二〇一〇、三六七〜三八五頁）。

▲ミヒエル・ヴォルフガング「屍骸を観る―根来東叔の「人身連骨真形図」とその位置づけについて」『中津市歴史民俗資料館 分館 医家史料館叢書』第二一号、中津市、二〇一二年、四二〜八九頁。

▲ミヒエル・ヴォルフガング「中津藩における天然痘との闘い」。青木歳幸・大島明秀・W・ミヒエル編『天然痘との闘い―九州の種痘』岩田書院、二〇一八年、二二五〜

二五二頁。

▲森納『因伯洋学史話』鳥取、富士書店、一九九三年。

▲安西安周『日本儒醫研究』東京、龍吟社、一九四三年。

▲山崎有信『豊前人物志』、東京、国書刊行会、一九三九年（復刻版、美夜古文化懇話会『豊前人物誌』行橋、美夜古文化懇話会、一九七三年）。

▲吉田忠「帆足万里－漢蘭折衷を説く儒家」。ヴォルフガング・ミヒェル、鳥井裕美子、川寫真人 共編、『九州の蘭学－越境と交流』、京都、思文閣出版、二〇〇九年、一二八より一三二頁。

▲吉田洋一「明治初期における耶馬溪地域の医療－屋形家史料「年中行事日記簿」を中心に」。『中津市歴史民俗資料館 分館 医家史料館叢書』、第七巻、中津市教育委員会、二〇〇八年、三二～五二頁。

▲吉田洋一「江戸時代後期における地域医療の実情－屋形家史料を素材として」。『中津市歴史民俗資料館 分館 医家史料館叢書』第八巻、中津市教育委員会、二〇〇九年、一一～七〇頁。

▲吉田洋一「耶馬溪屋形家の種痘活動－明治初期を中心に」『中津市歴史民俗資料館 分館 医家史料館叢書』第九巻、中津市教育委員会、二〇一〇年、一～三一頁。

▲若木太一「京都向井家墓碑考－文人向井元升の家系」『長崎大学教養部紀要 人文科学篇』第三三巻、第二号、一～一五頁。

▲ Michel, Wolfgang: Von Leipzig nach Japan – Der Chirurg und Handelsmann Caspar Schamberger (1623 – 1706). München: Indicium, 1999.

▲ Michel, Wolfgang / Wegerer-Klein, Elke: Drop by Drop – The Introduction of Western Distillation Techniques into Seventeenth-Century Japan. Nihon Ishigaku Zasshi – Journal of the Japan Society of Medical History, Vol. 50, No.4, 2004, pp. 463-492.

▲ Michel, Wolfgang: A naturalist lost – Johan Arnold Stützer (1763-1821) in the East Indies. In: Josef Kreiner (ed.): Japanese Collections in European Museums III. Bonn: Biersche Verlagsanstalt, 2015, pp. 147-162.

▲ Skuncke, Marie-Christine: Carl Peter Thunberg. Botanist and Physician – Career-Building Across the Oceans in the Eighteenth Century. Swedish Collegium for Advanced Study, 2014.

史料

▲「醫籍考」屋形諸道写、一冊（三六丁、一一・一〇×一七・三糧、屋形家旧蔵、中津市歴史博物館蔵（大島二〇一五年））。

▲「醫方思辨抜 全」（外題）、屋形諸道写（明和四年写）、一冊（三六丁、一四・一〇×二一・三糧、屋形家旧蔵、中津市歴史博物館蔵（屋形家・五五））。

▲「醫方思辨」（外題）、屋形諸道写、二冊三巻、（天）一〇一丁、

(地) 一〇二丁、二四・四×一六・八糶、屋形家旧蔵、中津市歴史博物館蔵(屋形家・五四)。

▲「易学啓蒙切紙伝授」(外題)、屋形諸道写(明和四年写)、一冊、二五丁、二六・六×二〇・三糶、屋形家旧蔵、中津市歴史博物館蔵(屋形家・一三九)。

▲「阿蘭陀油之書」(内題)、屋形諸道写(安永四、五年頃写)、一冊、五七丁、二六・六×一七・五糶、屋形家旧蔵、中津市歴史博物館蔵(屋形家・一二八)。

▲「家伝病名彙解卷之一」(内題)、屋形諸道写(安永四年写)、一冊、五四丁二五・三×一七・五糶、屋形家旧蔵、中津市歴史博物館蔵(屋形家・三八)。

▲「家伝病名彙解卷之二 自不至須」(外題)、屋形諸道写(安永四年写)、一冊、三〇丁、二七・九×二〇・六糶、屋形家旧蔵、中津市歴史博物館蔵(屋形家・三九)。

▲『記録并聞書扣帳 | 豊前国下毛郡西屋形村庄屋記録』後藤重巳校訂。別府大学附属博物館、一九八九年。

▲「灸穴定法 全」(外題)、屋形諸道写(安永二年写)、一冊、二〇丁、二六・八×一八・三糶、屋形家旧蔵、中津市歴史博物館蔵(屋形家・三四八)。

▲「灸法要穴」(内題)、屋形諸道写(明和八年写)、一冊、一九丁、二四・六×一六・九糶、屋形家旧蔵、中津市歴史博物館蔵(屋形家・四三)。

▲『慶応義塾入社帳』福沢研究センター編。第一卷、慶応義塾、一九八六年。

▲「外療内治法下」(外題、朱書)、屋形諸道写(安永四年写)、一冊、二二丁、二八・三×二〇・五糶、屋形家旧蔵、中津市歴史博物館蔵(屋形家・三四九)。

▲「講主龍渚先生 詩經」、屋形諸道写(安永四年写)、一冊、二二丁、二三・九×一六・五糶、屋形家旧蔵、中津市歴史博物館蔵(屋形家・三三八)。

▲「黄帝内経靈樞」(内題)、屋形諸道写(明和八年写)、一冊、五二丁、二二・四×一六・〇糶、屋形家旧蔵、中津市歴史博物館蔵(屋形家・四九)。

▲「紅毛流金瘡跌撲療治伝「他」」(内題)、屋形諸道写(安永五年写)、一冊、四九丁、一九・一×一三・六糶、屋形家旧蔵、中津市歴史博物館蔵(屋形家・四一)。

▲『小倉藩人畜改帳「三」』東京大学史料編纂所編、東京大学出版会、一九五七年。

▲「雑記」(内題)、屋形諸道写(安永五年写)、一冊、五〇丁、二六・五×一七・八糶、屋形家旧蔵、中津市歴史博物館蔵(屋形家・四五)。

▲「雑書「他」」、屋形諸道写(安永四、五年頃写)、一冊、五三丁、一二・八糶×一九・〇糶、屋形家旧蔵、中津市歴史博物館蔵(屋形家・四二)。

▲「小児科」(内題)、屋形諸道写(明和六年写)、一冊、七二丁、二二・〇×一五・八糶、屋形家旧蔵、中津市歴史博物館蔵(屋形家・五二)。

▲「小兒治方」(内題)、屋形諸道写(明和六年写)、一冊、

三五丁、二七・〇×一九・七糶、(屋形家・二八六)

▲「必用灸穴秘訣」(内題)、屋形諸道写(安永五年写)、一冊、五六丁、一九・四×一三・六糶、屋形家旧蔵、中津市歴史博物館蔵(屋形家・四〇)。

▲平田長太夫の修業証書。「寛文六年陽月吉祥日」成立、深水家旧蔵、中津市歴史博物館蔵。

▲『福翁百余話』、福沢諭吉著、東京、時事新報社、一九〇二年。「脉訣」屋形諸道写(明和六年写)、二冊、四五丁・五一丁、二四・二×一六・九糶、屋形家旧蔵、中津市歴史博物館蔵(屋形家・三五二)。

▲「無題」屋形諸道写(明和六年写)、一冊、七九丁二一・八×一五・五糶、屋形家旧蔵、中津市歴史博物館蔵(屋形家・五一)。

▲「無題」(紅毛流膏藥之書、羅転韻。紅毛二十五横文字、阿蘭陀水藥調合書)一冊、四二丁、一九・一×一三・三糶、屋形家旧蔵、中津市歴史博物館蔵(屋形家・五二六)。

▲「無題」(「紅毛流膏藥之書」など)屋形諸道写(安永四・五年頃)、一冊、四二丁、一九・一×一三・三糶屋形家旧蔵、中津市歴史博物館蔵(屋形家・五二六)。

▲「無題」(「紅毛流膏藥之書」など)屋形諸道写(安永四・五年頃)、一冊、四二丁、一九・一×一三・三糶屋形家旧蔵、中津市歴史博物館蔵(屋形家・五二六)。

注

1 先行研究として、写本「外療内治法」および「醫籍考」を中心に諸道の学習について分析した大島明秀(二〇〇八年、二〇一五年)の論文がある。

2 Michel (1999), pp. 14-21.

3 向井元升(靈蘭)の墓碑銘により。若木太一(一九九三)、一一〜一三頁。緒方正清(一九八〇)、一〇七〜一三三頁。賀川明孝(一九九五)。

4 今永正樹(一九八二)、七四〜七七頁。

5 川島真人(一九九二)、一九二頁。

6 ミヒエル(二〇一一)。

7 中津市立小幡記念図書館蔵。

8 栗崎流外科については古賀十二郎(一九七二)、二三〜四二頁および宗田一(一九九二)参照。

9 川島真人(二〇〇五)、一八二〜一八三頁。

10 ミヒエル(二〇一一)、五二〜五三頁。

11 疫病神についてはミヒエル(二〇一八)、二二五〜二二八参照。

12 青木歳幸(一九九八)、七五〜七六頁。

13 『韓非子』五蠹。『史記』第五六卷(陳丞相世家)。『続日本紀』養老五(七二)年六月戊戌。

14 Michel (1999), pp.16-17.

15 今永正樹(一九八二)、七四〜七七頁。

16 帆足万里については吉田忠(二〇〇九)参照。

17 『適々斎塾姓名録』、緒方富雄(一九六七)。『福翁百余話』第十六章、六七頁。

18 中津市大江医家史料館には、華岡家から大江家に宛てた書簡三通(大江玄明宛華岡準平書簡一通、大江雲澤宛華岡準平書簡一通、大江雲澤宛華岡良平書簡一通)が所蔵されている。細田富多(二〇〇七)。

19 「華岡青洲先生春林軒門人録」、吳秀三(一九七二)。

20 「大槻家門人帳」により。板沢武雄(一九九九)参照。

21 「慶応義塾入社帳」により。

22 「及門録」により。青木歳幸(一九九六)参照。

23 「門人録」により。森納(一九九三)参照。

24 平松勘治(一九九九)。

25 デイルクスの教え子には久留米藩の太田黒玄淡および一六七三年幕府の宗門改め参勤通詞ならびに医官となった西吉兵衛(玄甫)がいる。ミヒエル(二〇一一)。

26 『福翁百余話』第十六章、六六〜六七頁。

27 ミヒエル・ヴォルフガング、大島明秀、吉田洋一(二〇〇九)。

28 屋形家については『大分県史料』(「宇佐屋形三郎文書」、富田修司

- 21008) およびミヒェル・大島・吉田(21009)を参照。
 30 『豊前中津田信伝』(二二頁)が示す「乗徳」は誤りである。
 下毛郡の上秣村、下秣村、西秣村のいずれかにあたる。
 31 「記録并聞書扣帳」、十四頁。
 32 『書経』虞書・大禹謨「禹曰、於帝念哉、徳惟善政、政在養民」。
 33 「屋形家系図」により。
 34 今永正樹(一九八二)、一四六―一四七頁。ミヒェル(二〇〇三)、三頁。
 35 小倉県事小幡高政宛ての開業届(明治六年七月一九日)(中津市歴史博物館蔵。屋形彰男所蔵の系図により)。
 36 青木歳幸(一九九八)、一五八―一八六頁を参照。
 37 青木歳幸(一九九八)、一三三―一五七頁。
 38 青木歳幸(一九九八)、一三三―一五七頁。
 39 「小倉藩人番改帳三、二二二―二二七頁」。
 40 青木歳幸(一九九八)、一五八―一八六頁。
 41 「盤」の特徴については大島明秀(二〇一五)が詳細に分析している。
 42 呉澄については福田殖(一九八六)参照。
 43 内藤記念くすり博物館 大同薬室文庫にも収蔵されている。
 44 趙繼宗『儒医精要』(嘉靖七年序) および久保政新著 岡本一抱重訂『儒医精要釋義』(正徳三年序)参照。
 45 曲直瀬道三の『脉訣簡略』延宝八(一六八〇)年刊。
 46 道三の号に雖知苦斎、孟静翁などがある。
 47 (宋) 錢乙撰、(宋) 閻孝忠集、(明) 薛鏡校註『錢氏小兒直訣』。
 48 京都府医師会(一九八〇)、三七九頁、七六〇頁。
 49 「灸法要穴」 龍谷大学図書館(695346.W)。
 50 徂徠物選評、宇恵校『古文矩』松本善兵衛、明和元(一七六四)年序。
 51 大島明秀(二〇〇八)。
 52 大島明秀(二〇一五)参照。
 53 陳言(陳無沢)『三因極一病証方論』大阪、オリエント出版社、二〇〇一年。
 54 大島明秀(二〇一五)六頁。
 55 『医史展覧会陳列品目 昭和九年四月―第九回日本医学会医史展覧会』(第九回日本医学会誌) 一九三四年、六九四頁。
 56 桂洲甫著『病名彙解』植村藤右衛門、貞享三(一六八六)年刊。蘆川桂洲については安西安周『日本儒医研究』(一九四三)、五五―五六頁参照。
 57 鶺鴒軒文庫 V11:1012 (富士川家藏本・土肥白澤旧藏本)。
- 58 詳細については、古賀十二郎(一九七三)、一二二七参照。
 59 肖像画については杏雨書屋の『医家肖像集』二五六頁参照。武田科学振興財団(二〇〇八)。
 60 吉日。
 61 鶴膝風、足がツルの足のようによせ細り、歩けなくなる病氣。
 62 朱書。
 63 宝永三(一七〇六)年に完成した「紅夷外科宗伝」は「仕掛書」、「金瘡書」、「金瘡跌撲」、「膏藥書」、「油之書」、「油取様書」から構成されている。
 64 Michel / Wergen-Klein (2004).
 65 九州大学医学図書館蔵(和漢古医書)。
 66 九州大学医学図書館蔵(ミヒェル文庫)。
 67 詳細についてはミヒェル(二〇一〇)参照。
 68 諸道の仮名表記はオランダ語の訛りを示している。
 69 出島商館長フェイト(A.W. Feith)の業務日誌、一七七五年一月二七日。
 70 塩化第二水銀。
 71 ツンベルクについては、Skuncke (2014)参照。
 72 ハイステルという表記もある。オランダ語読みはヘーステル。
 73 ハイスターについては、宗田(一九八九)、二三三―二三八頁参照。
 74 新古典籍総合データベースには資料名も著者森村玄龍の名も登録されていない。
 75 写本「外療内治法」および倉成龍渚との関係については大島明秀(二〇〇八)参照。
 76 高橋文(二〇一〇)。
 77 号は田信。屋形養民(諸道)に宛てた手紙については熊谷克己(二〇〇〇)一九―二二頁参照。

Wolfgang MICHEL

On the Dissemination of Medical Knowledge to the Countryside — The Medical Studies of Yakata Moromichi (1746–1826)

After centuries of hegemonic wars, the new sociopolitical order successively established by the Tokugawa rulers during the first decades of the 17th century deeply influenced the world of medicine and medical care. The destruction of Buddhist temples had already accelerated the secularization of medicine. Now, local rulers sought physicians to strengthen the fabric of their young domains. For lack of local candidates, many first-generation physicians in regional fiefdoms, such as Nakatsu, were recruited from elsewhere. As the genealogical tables and registers of families such as Murakami, Ōe, or Karashima show, specific skills or an exceptional educational background were helpful in gaining employment as a clan physician. From the second generation on, prospective successors, preferably the firstborn son, received their basic education in the private homes of local samurais or priests (*terakoya*). Thereupon, they became disciples of a more or less renowned physician, depending on available financial resources. The licenses provided at the end of this professional training used to oblige the young physicians to keep the acquired knowledge secret. For a while, this hampered the spread of medical knowledge and the development of a homogeneous medical care system even at the level of domains.

From the second half of the 17th century on, we observe more and more aspiring young men on pilgrimages through the country to old and new centers of knowledge exchange, such as Nagasaki and Kyoto and, later, Osaka and Edo. Nagasaki, in particular, attracted visitors and sojourners from all over the country as the interpreters of the Dutch and Chinese trading posts provided medical books, instruments, *materia medica*, and instructions at their private schools. While absorbing foreign know-how, interactions between Japanese visitors and students raised the awareness of regional differences and the nationwide situation.

At the end of the 17th century, people living in the castle cities of domain rulers could access health care provided by specialists in internal medicine, surgery, acupuncture, pediatrics, obstetrics, and so on. In contrast, the vast majority of villages remained without professional help, depending on folk medicine, homespun remedies, and magic rituals. However, this was starting to change. Heavy losses among the rural workforce due to epidemics, combined with rising levels of literacy and income, induced local headmen and domain administrators to seek suitable solutions. Sometimes they managed to attract itinerant physicians to settle down and make a living by providing medical care and basic education to village children. In other cases, members of the local communities became interested in medicine and received a more or less intensive medical education.

Among the latter group, we find Yakata Moromichi, whose ancestors were Shintō priests at the famous Usa Shrine over many generations before the family moved to the Yabakei area. Moromichi was born in Yakata, a hamlet in a narrow valley about 17 km away from the domain

center and Nakatsu castle. His father served as village headman and Moromichi seems to have received a thorough education during his childhood. There is no source material indicating the circumstances of his decision to study medicine, but he could not have pursued his studies over several years without the permission of the authorities, not to mention several journeys and a long stay at Nagasaki. Fortunately, we are able to trace the course of his studies through 18 manuscripts preserved in the Yakata collection. Most of them show one of his pen names, sometimes place names and dates, and a few texts have been identified by the characteristic features of his handwriting.

The first two manuscripts relating to medicine were written in 1767. One shows teachings about traditional medicine given by an unknown physician, Morimura Genryū, from a village in the neighboring province of Bungo. The second one deals with Chinese-style divination. Three years later, Moromichi compiled an untitled booklet that again shows a variety of diseases and Chinese-style treatments together with several prescriptions given to him by individuals, such as a “Takaya Sōbē” or “Mr. Munakata from Nakatsu.” During that same year, he studied pediatrics using a book published by the 11th-century Chinese pediatrician Yi Qian and prescriptions collected in the Japanese Suō Province. For the first time, he mentions a “Dutch-style” treatment. Further manuscripts on pediatrics written in 1769 indicate the importance of this discipline, especially for a prospective rural physician who had to cope with the then high child mortality rate.

In 1769, Moromichi turned to pulse diagnosis. The related manuscript draws from the famous Song pulse book, *Mài Jué*, together with Manase Dōsan's writings on that matter. Furthermore, it contains Zhao Jizong's thoughts about the appropriate “Medical Way” of a Confucian physician. At this stage, Moromichi seems to have been primarily interested in the Chinese teachings of the Jin–Yuan era and their adaptation to Japanese conditions by Manase Dōsan, the leading scholar of what is nowadays called the “School of Later Prescriptions” (*Goseihō-ha*).

In 1771, Moromichi compiled a manuscript on moxibustion based on a book by Ajioka Sanpaku, who was strongly influenced by Manase's school. Perhaps for that reason, Moromichi traveled to Kyoto in 1773. When he returned to Nakatsu, the Confucian Kuranari Ryūshō had returned from extensive studies and was employed as an official Confucian scholar of the Nakatsu Clan. Until the establishment of the clan school in 1796, Kuranari was teaching in his residence and, for a while, Moromichi became his disciple.

During the early 1770s, Maeno Ryōtaku, Sugita Gempaku, and other physicians in Edo had written a translation of the Dutch edition of J. A. Kulmus' “Anatomic Tables” (*Ontleedkundige Tafelen*). Maeno, an ardent scholar of the Dutch language, served as a physician in the Edo residence of the Nakatsu domain. He had undertaken most of this pioneering endeavor and enjoyed the support of Lord Okudaira Masaka. Printed in 1774 under the title “New Book on Anatomy” (*Kaitai Shinsho*), this translation became a milestone in the history of “Dutch studies” (*Rangaku*). More than ever before, physicians in the Nakatsu domain were aware of Western medicine.

In 1775, Moromichi went to Nagasaki, the mecca of “Dutch studies”, where he stayed until the following year. Maeno Ryōtaku was on good terms with Yoshio Kōgyū, a senior interpreter at the Dutch trading post and a renowned scholar who stood at the forefront of Dutch studies and attracted visitors and disciples from all over the country. This might have facilitated Moromichi's access to Yoshio. During his stay in Nagasaki, Moromichi studied Yoshio's vast collection of books, manuscripts, and instruments. His excerpts and notes reflect important 17th-century texts related to Western medicine and pharmaceuticals. Several manuscripts written in Nagasaki deal with ulcers, all kinds of wounds, fractures, and basic surgical operations, such as harelips. They describe a great number of plasters, ointments, and tinctures, as well as the distillation of pharmaceutical oils.

In that very same year, 1775, the Swedish physician and naturalist Karl Peter Thunberg arrived in Nagasaki. His later publications about Japan and Japanese plants elevated him to the ranks of Engelbert Kaempfer and Philipp Franz von Siebold. This eminent scholar had mercury(II) chloride

in his luggage and attempted to introduce “Van Swieten's liqueur” as an effective and palatable mercury treatment for syphilis. Thunberg's name can be found in Moromichi's notes, but none of his teachings became known to this rural physician.

After roughly two years in Nagasaki, Moromichi returned to his native village. In contrast to the majority of high-ranking domain physicians, he did not try to gain a reputation by connecting himself to one of the dominant teaching traditions. His manuscripts reveal that he had received an excellent education and was well-versed in classic Chinese and Confucian studies. Nevertheless, he developed only a limited interest in theoretical deliberations about illnesses and their causes. Most of his excerpts and notes deal with practical aspects of medicine. Being less bound by medical doctrines than many of his colleagues in castle cities, he seems to have applied Song- and Ming-era Chinese prescriptions for internal problems and Western-style treatments in surgical cases. This was more than the villagers of Yabakei could have hoped for.

A Word from the Editors

In June 2019, 109 years after its foundation, the Nakatsu Municipal Museum of History and Folklore closed its doors. Its collections were transferred to the new Nakatsu History Museum, which was opened in November 2019. Accordingly, the name of the museum's publication series was changed to “Nakatsu History Museum — Medical Archive Series.”

On 13 November 2019, the City of Nakatsu and its Board of Education signed an agreement with the National Institute of Japanese Literature (Tachikawa, Tokyo) concerning historical books and manuscripts (*kotenseki*) kept in its local museums and collections. Digital images of these historic materials will be made available to the public through the “Database of Premodern Japanese Works” (<https://kotenseki.nijl.ac.jp/?ln=en>). This database serves as the national portal site for images of premodern Japanese texts and related bibliographic information. Several dozen documents have already been uploaded. Many others will follow and hopefully stimulate further research.

CONTENTS

PREFACE

ARTICLES

Yōichi YOSHIDA

On the Disciple's Register of the Yokoi Family 1

Akihide ŌSHIMA

On the Manuscript “Studying Acupuncture for Myself (*I ga gaku shin*)” kept by the Physician Family Yakata 14

Toshihiro SOGA, Kōhei MITANI

Kamiya Hiroyoshi (1788–1859) and his Interactions with Scholars of “Dutch Studies”
..... 32

Wolfgang MICHEL

On the Dissemination of Medical Knowledge to the Countryside — The Studies and Travels of the Rural Physician Yakata Moromichi 47

RESEARCH NOTE

Yūki WASHIZAKI

On the Foreword of the Manuscript “*Hōkoku Kikō*” Kept by the Yabakei Museum
..... 76

ABSTRACTS 81

INDEX 85

Wolfgang MICHEL, Yōichi YOSHIDA, Akihide ŌSHIMA (ed.): Source Material and Personalities 7.
NAKATSU HISTORY MUSEUM — MEDICAL ARCHIVE SERIES, No. 19
CITY OF NAKATSU, BOARD OF EDUCATION
Takahashi Printing Co., Nakatsu, March 2020

ISSN 2432-0773